

寺 開 土 遺 跡

長野県小県郡丸子町寺開土遺跡発掘調査報告書

1988.3

長野県上田建設事務所
丸 子 町 教 育 委 員 会

ダウン

download

序

丸子町腰越の寺開土地籍付近は古くから交通の要衝となってきましたが、昨年には東信と中信地方を結ぶ国道254号線小屋坂トンネルが貫通するなどし、その重要性がより一層増すこととなりました。

それに伴って既存道路の拡幅・歩道設置工事が行われることとなり、丸子町の代表的な中世遺跡である寺開土遺跡の一部が破壊されることが確実となったため、事業主体である長野県上田建設事務所より委託を受けた丸子町教育委員会では、丸子町寺開土遺跡発掘調査団を組織し、発掘調査を委託しました。

この結果、調査報告書に詳述されているとおり、予想以上に遺跡破壊が進んでおり、期待どおりの成果を得ることができなかったともいえますが、貴重な銭貨埋納容器に転用された古瀬戸四耳壺や美術的価値の高い古瀬戸水注などの出土で知られる、寺開土遺跡の解明が一步進んだのは確実で、この地方の歴史解明の貴重な手がかりが得られたものと考えられます。

年度途中、急に実施することとなった緊急調査でありました。時間など様々な制約があるにもかかわらず精力的に仕事を進めていただいた調査関係者の皆さんに深く感謝申し上げますと同時に、調査にあたって御援助・御協力を賜った長野県教育委員会、長野県史刊行会の皆さんや、東京都東北新幹線赤羽地区遺跡調査会の皆さん、また長野県上田建設事務所や丸子町役場土木課、依田窪建設協同組合の皆さんなどに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

昭和63年 3 月

丸子町教育長 吉池欽郎

例 言

- 1、本書は、昭和62年度国庫補助事業道路改良工事国道254号線有坂＝新屋地籍に先立って実施した、寺開土遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、遺物整理及び図版作成・原稿執筆は竹内一徳が行った。また報告書の編集は、竹内・綿田で実施した。
- 3、挿図の縮尺はそれぞれに明示してある。
- 4、この調査にあたっては、下記の機関ならびに人々から御指導・御協力をいただいた。御芳名を記し、感謝の意を表したい。(五十音順・敬称略)
〔機関〕 東京都東北新幹線赤羽地区遺跡調査会、長野県上田建設事務所、長野県教育委員会文化課、長野県史刊行会、丸子町役場土木課、依田窪建設協同組合
〔個人〕 宮下健司
- 5、本調査に関するすべての資料は、丸子町教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

目 次

1、発掘調査に至るまでの経過と調査体制	1
2、遺跡の環境	2
3、遺構	6
4、遺物	6
5、調査以前出土遺物	11

挿 図 目 次

- 第 1 図 寺開土遺跡付近地形図
- 第 2 図 寺開土遺跡付近遺跡分布図
- 第 3 図 調査区位置図
- 第 4 図 土層柱状図（3 号グリッド東壁）
- 第 5 図 遺物出土分布図とグリッド配置図
- 第 6 図 2 号グリッド北壁断面図
- 第 7 図 出土銭貨拓本図
- 第 8 図 調査以前出土遺物実測図（参考）
- 第 9 図 古瀬戸四耳壺納入銭貨拓本図（参考）

表 目 次

- 第 1 表 寺開土遺跡付近遺跡地名表
- 第 2 表 出土銭貨種別表
- 第 3 表 調査以前出土遺物観察表（参考）
- 第 4 表 古瀬戸四耳壺納入銭貨種別表（参考）

図 版 目 次

- P L 1 1. 遺跡遠景（依田川対岸、東より） 2. 調査区全景（北より）
- P L 2 1. 発掘作業 2. 発掘作業 3. 古銭出土状況 4. 2 号グリッド東壁土層状況
5. 1 号グリッド北壁土層状況
- P L 3 調査以前出土遺物（参考）

1、発掘調査に至るまでの経過と調査体制

長野県小県郡丸子町腰越地区の南西端、武石村との境界近くに位置する「寺開土遺跡」は、かつて昭和30年の夏、遺跡東端を貫通する県道・上田茅野線拡幅工事に伴って、古瀬戸四耳壺や古銭、美術的価値の高い古瀬戸水注など、貴重な遺物が発見され、当地方第一級の中・近世遺跡として注目されてきた。

遺跡の背後に連続する内村山脈には随所に中世城館跡が見られ、政治的・軍事的に重要な拠点となっていたと想像されるが、遺跡付近の小屋坂峠は特に、街道が通じる主要峠としての役割をもっていたと考えられている。この小屋坂峠山腹に、現代の主要街道である国道254号線・小屋坂トンネルが開削されることとなり、トンネル及び取付道路工事が着手された。この工事に伴い、周知の遺跡である寺開土遺跡の一部が破壊される虞れが生じたため、丸子町教育委員会では独自に、図面上の検討ならびに昭和59年12月には現地調査を実施、遺跡に与える影響のないことを確認した。

その後本年に至って、トンネル開通後の交通量増大を見越して、遺跡内の県道拡幅・歩道設置工事が行われることとなり、昭和62年8月11日、事業主体である長野県上田建設事務所と、長野県教育委員会文化課、丸子町教育委員会の3者により保護協議がもたれ、歩道設置部分約200㎡を発掘調査して記録保存を図ることが定められた。

協議後文化課によって積算された調査費は70万円で、事業主体の建設事務所が負担し、調査は丸子町教育委員会が受託して、発掘調査団を組織して実施した。調査体制及び調査経過は次のとおりである。

調査体制＝丸子町寺開土遺跡発掘調査団

(五十音順)

参 与	五十嵐幹雄、小林重義、塩入秀敏
団 長	関 孝一
調 査 主 任	竹内一徳
調 査 員	赤松 茂、井上良子、川村寿一、北沢けさ子、佐々木多四郎、清水啓道、滝沢敬一、塚越安廣、都築 誠、中村武人、宮沢博家
特別調査員	綿田弘実
事 務 局 長	堀内憲明
事 務 局	竹内一徳、滝沢敬一
監 査 員	伊藤 武

調査の経過

- 8月11日（火） 保護協議。事前工事に伴う出土遺物拾得届提出。
- 8月19日（水） 文化財保護法第57条の3第1項の規程に基づく事業主体の発掘通知受領、町教委の意見書を付し、県教育委員会を経由して文化庁へ提出。
- 9月2日（水） 県教育委員会保護通知受領（調査費確定。70万円）。
- 9月7日（月） 調査委託契約書締結（事業主体・町教委、町教委・発掘調査団）。文化財保護法第98条の2第1項の規程に基づく調査主体の発掘通知提出。
- 10月10日・11日（土・日） 寺開土遺跡発掘調査〔参加者、10日14人、11日16人〕
- 10月14日（水） 出土遺物拾得届及び発掘調査終了届提出。
- 11月24日（火）～ 出土遺物整理、報告書原稿作成着手。
- 3月25日（金） 報告書完成。

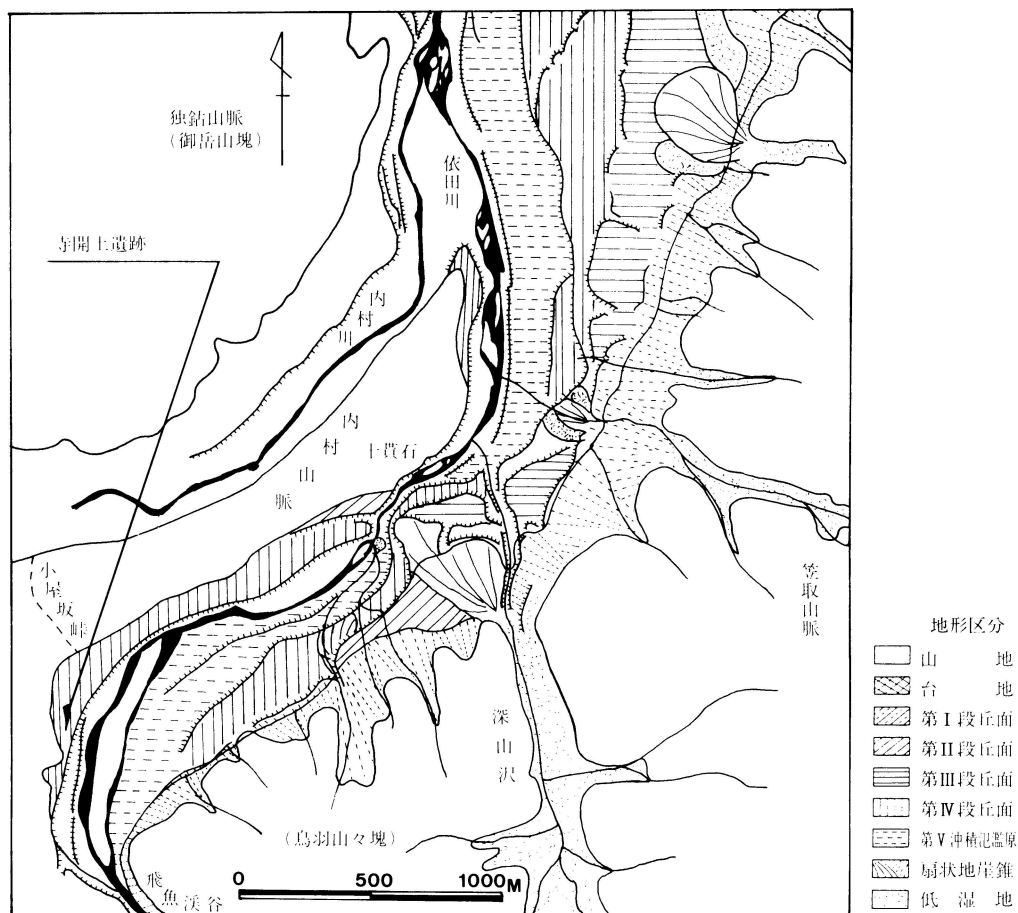
2、遺跡の環境

寺開土遺跡は、丸子町大字腰越字寺開土地籍一帯に広がる遺跡で、紡錘形状の丸子平野最南端部、十貫石峡谷を境に独自の紡錘状を呈する腰越盆地左岸の河岸段丘面（Ⅳ面）上に位置する。腰越盆地では、依田川左岸にⅡ・Ⅳの2面、右岸にⅡ・Ⅲ・Ⅳの3面の河岸段丘が見られるが、攻撃斜面となった左岸に沖積氾濫原がないのに対し、右岸には広大な沖積氾濫原があり、しかもその中に2～3の微段丘さえ見られ、滑走斜面であることを端的に示す。

腰越盆地は、当初内村山脈山麓を回った依田川が、十貫石峡谷のせきとめ作用により左右に蛇行、高位の段丘面の大半を失った結果として形成された。しかしその後、十貫石峡谷が下刻され、出口（十貫石峡谷）と入口（飛魚溪谷）が固定された結果、この間の流路は直線的な「く」の字形を呈することとなり、前述した段丘地形が形成された。

遺跡付近は最も浸食を受け易い個所といえ、段丘の幅も狭く、人々の居住に適しているとは言いがたいが、半面それゆえそこに着目した人々によって遺跡が成立したものとも考えられる。付近は近年まで、比高差約10mの断崖をもって直接依田川に接していたが、大幅に人の手が加えられ、大きな変化が見られる。

遺跡背後の内村山脈、依田川対岸の鳥羽山々塊、内村川北岸の御岳山塊とともに、中期中新世小県累層富士山層（歌代勤他1958。かつて本間不二男により内村層上部に分類された）に属する安山岩の卓越した急峻な岩山で、これらの山頂・山麓には多くの城館跡が見られ、当地方の武士興亡の舞台となった。ことに依田・長瀬・丸子氏などの中世豪族の根城で木曾義仲挙兵の根拠地ともなった丸子平野に、舌状に突出した内村山脈西北部には、丸子城・根場城・鳥屋



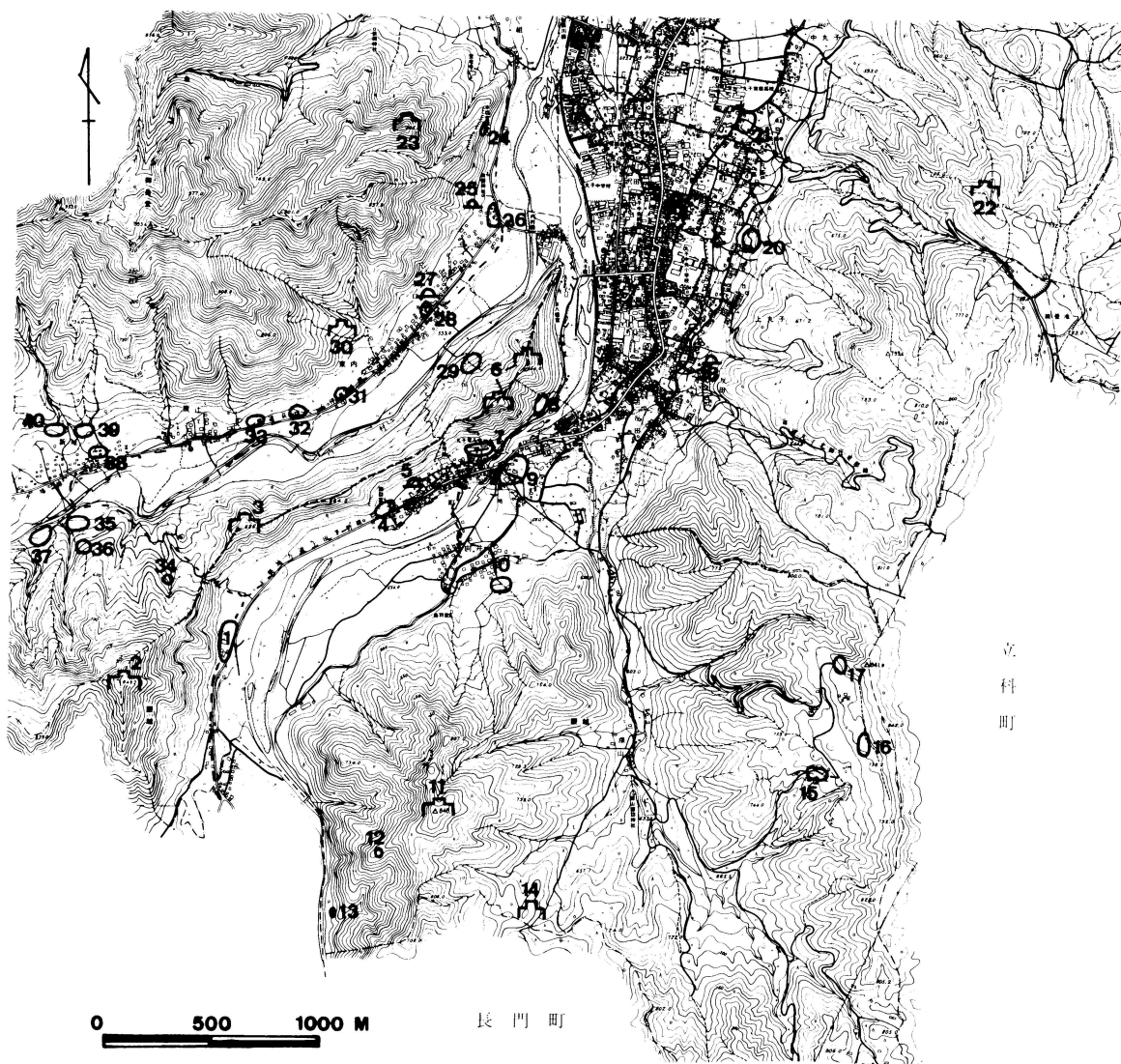
第1図 寺開土遺跡付近地形図

城、丸子居館跡などが連続しており、その中心となったものと考えられる。寺開土遺跡はこれと一体をなす代表的中世遺跡である。

さて、丸子城一帯の中世城館跡群の発掘調査がこれまで行われたことがないことから、確たることは言い難いが、文献等から推察するに、これらは平安末～江戸初頭にかけての長期間、継続して使用されたふしがある。かつて私は、丸子町郷土博物館の特別展に関連して、県内の主要古代・中世城館跡の出土遺物調査をしたことがあるが、出土遺物中最大のウェートを占める焼き物（陶磁器・土器）で見る限り、ほとんどに時期的な片寄りが見られた。すなわちこのことは、時の流れや権力者の移り変わりに応じて、城館跡の興亡も行われたものといえるが、継続使用が考えられる丸子城一帯は、そういった意味で特色をもつ。要所に位置し、軍事的に

も極めて重要であったがゆえのことであろうか。なおこの地方では、上田市塩田城も同様の継続使用が考えられるが、発掘調査によって得られた出土遺物の大半は室町時代（15～16世紀）のものである。

次に遺跡のすぐ脇にある小屋坂峠についても触れておかなければならない。この小屋坂峠道は古くは重要な街道の一つであった。もともと、依田川の本・支流に沿って、廊下状に谷平野が奥地にまで連なる依田窪地方は、中・南信地方と東信地方を結ぶ交通の要衝としての地位が高かった。ことに丸子城付近はその要にあたり、依田窪地方を通過する主要道路の入口となった。長い歴史の中で、主要街道筋に幾多の変化があったのは確実であり、小屋坂峠道がいつ頃最も利用されたかはまったくわからないが、峠の両側を押さえるかのように城が配置してある



第2図 寺開土遺跡付近遺跡分布図

第1表 寺開土遺跡付近遺跡地名表

No.	遺跡名	種類	地区	遺構・遺物	備考
1	寺開土遺跡	包蔵地	腰越	今回調査	
2	鳥屋城跡	城跡	武石村、腰越、東内		
3	根場城跡	"	腰越・東内		
4	後田遺跡	包蔵地	腰越	縄文	
5	長者穴古墳	古墳	"	横穴式石室、終末期円墳	半壊
6	丸子城跡	城跡	腰越・上丸子・東内		2カ所
7	下町遺跡	包蔵地	腰越	縄文	寺院跡伝承
8	丸子城おたや居館跡	居館跡	"	土師系	
9	淵ノ上遺跡	包蔵地	"	縄文、土偶、石鏃、石棒、石斧	
10	岡森遺跡	"	"	縄文	
11	鳥羽城跡	城跡	"		
12	鳥羽山観音洞窟遺跡	祭祀跡	"	鉄製農具、木簡他	第1、第2洞窟あり
13	鳥羽山洞窟遺跡	葬所跡	"	土師、須恵、曝葬遺構他	S41～43調査。国史跡
14	勝見城跡	城跡	"		不確定要素有
15	小丸山遺跡	包蔵地	"	土師、打石斧	
16	池ノ芝遺跡	"	"	縄文、土師、須恵、石鏃	
17	七曲り遺跡	"	"	土師	
18	藤塚古墳	古墳	上丸子	横穴式石室、終末期円墳	
19	沢田大塚古墳	"	"	" "	
20	大ばさま遺跡	包蔵地	"	布目瓦	窯址の可能性も有
21	寺屋敷遺跡	"	中丸子	縄文、土師、須恵	
22	箱山城跡	城跡	"		
23	依田城跡	"	御岳堂		
24	岩谷堂洞窟遺跡	葬所跡	"	土師、須恵、銅鏡、曝葬遺構他	S61調査
25	池の平古墳	古墳	東内	鉄剣、勾玉、甌、提瓶他	半壊
26	池の平遺跡	包蔵地	"	土師、須恵	
27	高塚古墳	古墳	"	横穴式石室、終末期円墳	
28	下町遺跡	包蔵地	"	土師	
29	丸子城本居館跡	居館跡	"	天目茶碗他	
30	内村城跡	城跡	"		不確定要素有
31	今津遺跡	包蔵地	"	土師	
32	道祖神遺跡	"	"	"	
33	鈴岩遺跡	"	"	"、土師系（内耳）	
34	小屋坂遺跡	"	"		
35	大年寺遺跡	"	"	土師、須恵	
36	上兵庫平遺跡	"	"	縄文、土師	
37	下兵庫平遺跡	"	"	" "	
38	宮脇遺跡	"	"	土師	
39	柳平遺跡	"	"	"	
40	東上野遺跡	"	"	"、土師系（内耳）	

ことなどから考えて、主要街道となった時期があったことは間違いない。小屋坂峠を經由した街道は、現・武石村沖から寺開土を経て峠を越え、内村道に合流して塩田方面に抜けたラインと、大門峠から深山へ降り、向井腰越付近で依田川を渡って峠を越えたルートなどが考えられる。

さてここで、寺開土遺跡に係る伝承に関して考えてみたい。寺開土地籍には、現在腰越中町地籍にある全芳院（曹洞宗）があったが、天文年間（1532－55）に火災に会い、元亀元年（1570）現在地に移転したと寺伝にいう（明治14年調べ、長野県町村誌東信篇腰越村の項に記載）。極めて条件の悪かった今回の調査ではこの件に関して明瞭な証拠が得られなかったが、昭和30年の県道拡幅工事に伴う出土遺物や、その後昭和40年代初頭に行われた製粉工場造成工事の折、多量の人骨が出土したという工事関係者の話などを考えあわせると、寺開土地籍に墓地をもった寺があったという話も、まんざら信憑性のうすい話ではない。

寺伝にいう焼失の時期・天文年間は、甲斐の武田氏の信濃進行が活発化して、幾多の合戦が繰り広げられた時期である。丸子氏と密接に繋がり、街道の要所に位置した寺は、この時期、いつ焼き打ちされても不思議でない環境に置かれていたと考えられる。ことに天文22年（1553）の塩田城攻めに際しては、長窪宿で陣を整えた武田軍は、寺開土遺跡直上の高鳥屋城（遺跡分布図中の鳥屋城）、次いで内村城を陥落させ塩田城に至るが、この折に焼失した可能性も高い。

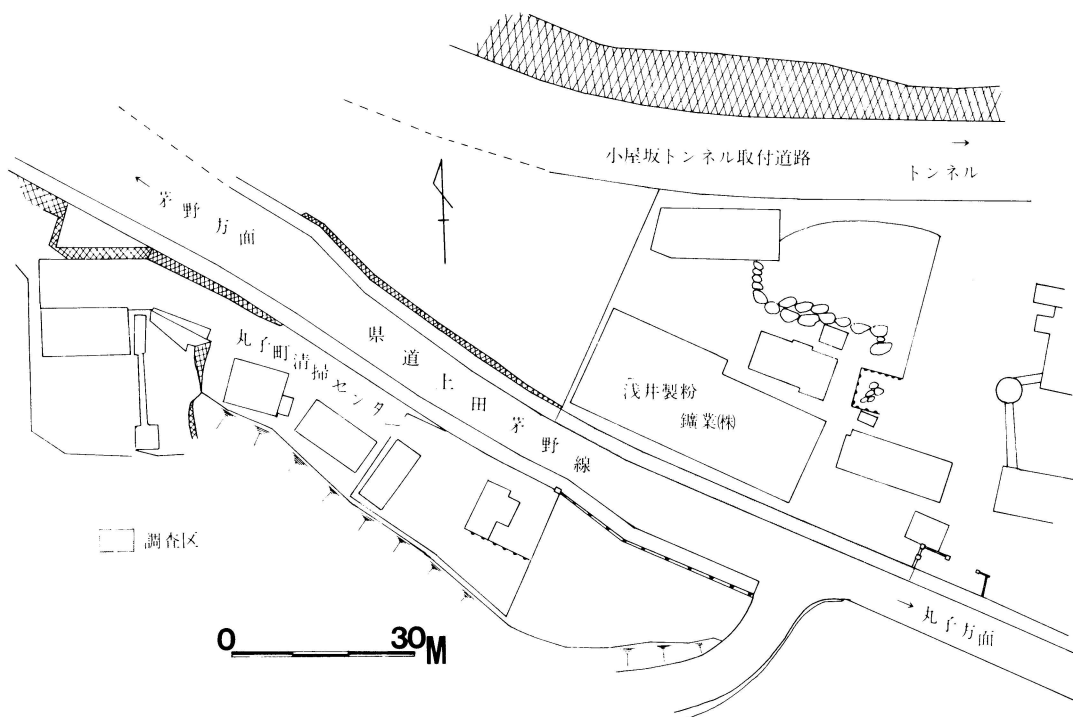
3、遺 構

今回の調査区域は製粉工場の擁壁と県道に挟まれた、遺跡の東端に沿って狭長に連続する区域であることから、なんらかの遺構に当たる可能性が強いものと考えられていた。しかし調査したところ、なんの遺構をも検出することができなかった。

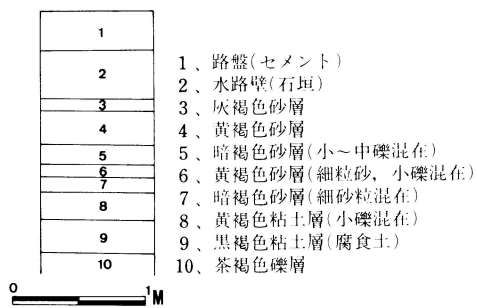
これは西側製粉工場の擁壁及び、東側の道路・側溝工事に伴って、左右から攪乱が行われたことが大きく影響している。特に比較的浅い個所にある古代末～中世の遺物包含層及び遺構面は重大な影響を受け、攪乱を受けていないところは、とびとびに、ごくわずかしは見られなかった。しかし区域内4個所にグリッドを設け、更に下部を掘り下げたところ、おおむね現道路盤から1m以下は攪乱の痕跡がみられなかった。なお調査区域に含まれるが、溝が掘削されたり、セメントによる構造物が造られるなどして、確実に破壊が行われていると考えられた、調査区の南半部では調査を実施しなかった。

4、遺 物

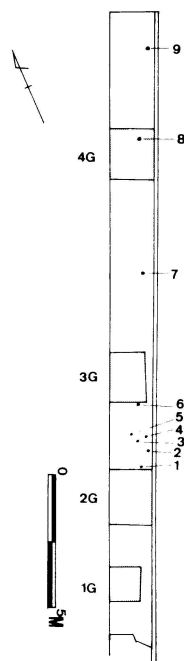
調査面積が限定されていることもあり、出土遺物はごくわずかであった。遺物では特に銭貨



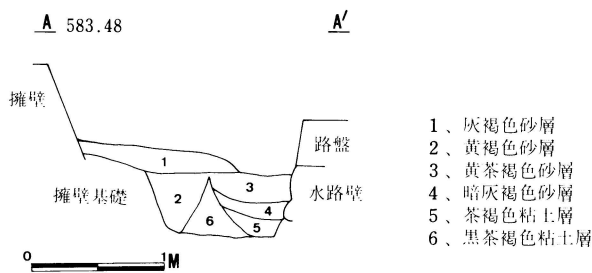
第3図 調査区位置図



第4図 土層柱状図 (3号グリッド東壁)



第5図 遺物出土分布図とグリッド配置図



第6図 2号グリッド北壁断面図

が多い。この付近では銭貨埋納容器に転用され、内に約3000枚の銭貨がぎっしりつまった古瀬戸四耳壺も出土しているが、これはほぼ完全な状態で、しかも蓋石まで伴っていたというから、この四耳壺意外にも銭貨埋納容器があり、それが破壊・攪乱されて第7図に見られるような中身が拡散したとも考えられる。

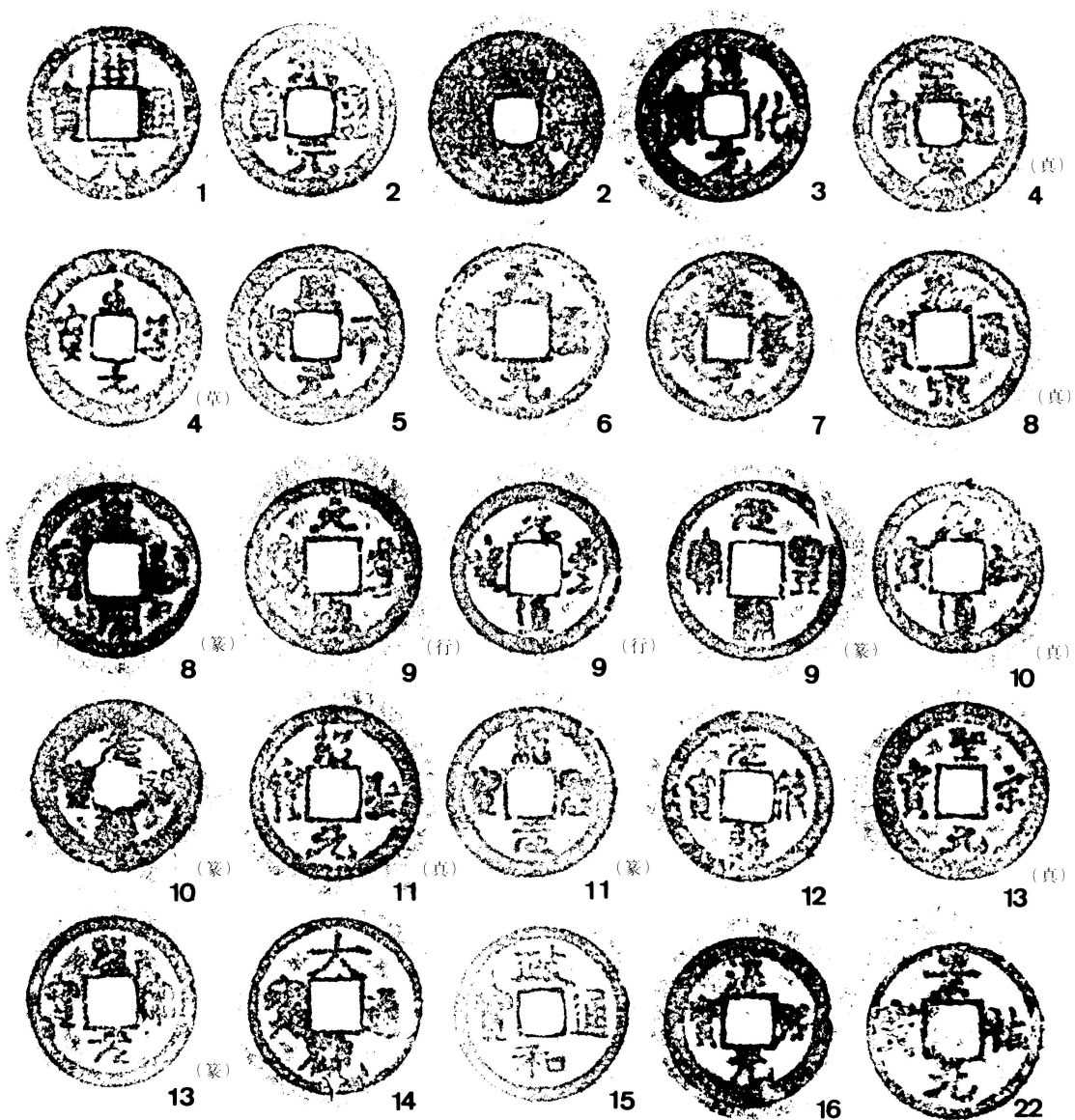
前述したように、上位の古代以降の遺物包含層・遺構面は、たび重なる工事の影響を受けていて、遺物の出土地点・土層は重要な意味をもたないが、下位土層には影響が見られず、黒曜石片などの存在も見られることなどから、原始時代の遺構・遺物の存在する可能性があることも確認できた。

〔古銭〕

発掘調査に先立つ保護協議に伴う調査で42枚、発掘調査時に26枚の銭貨が出土した。その明細は第2表に掲げたとおりである。うち、調査前に出土した42枚は同一地点出土、発掘調査時出土の26点は、第5図のNo.1で2点、No.2で22点、No.7で1点、出土地不明のものが1点である。

出土銭貨の下限は、淳熙元宝（初鑄年1174年）で、これは四耳壺納入銭貨の下限の咸淳元宝（初鑄年1265）よりも若干古い。また上限はともに開元通宝（初鑄年621）である。

一般的に銭貨は長期間流通したのが普通で、そのため磨耗したものも多かった。また中世の主体となった海外渡来銭については、渡来銭専用時代ともいうべき平安時代中期から鎌倉時代の後を受けた、私鑄銭混用時代ともいうべき室町時代には、主体となる明銭に、江蘇・浙江・福建・広東などで鑄造された明の私鑄銭が大量に混在するほか、日本国内においては有力領主・大商人などの手で、中国渡来銭や皇朝銭の模造が活発に行われた。この模鑄銭の問題や銭貨の継続使用の問題があるからこそ、出土銭貨が少量の場合、銭貨の時期が直ちに時期決定の根拠にはなりえないのであるが、今回出土銭貨の場合は、私鑄銭混用時代の明銭がまったく見られないこと、四耳壺納入銭貨の傾向なども勘案すると、鎌倉時代後半～室町時代の前半にかけて



第7図 出土銭貨拓本図
(ナンバーは種別表と同じ)

第2表 出土銭貨種別表

古銭No.	名 称	初鑄年	数 量	特 徴	備 考
1	開元通宝	唐 621	6	背文無し。	唐の代表的通貨。長期間大量に鑄造され日本への渡来量大。左角に宝の字を置く形式を固定化。
2	宋通元宝	宋 960	1	四隅に小孔を穿つ。眼帯に使用された多能性もある。裏面磨かれ平ら。	別称・宋元通宝。背文変化あり。
3	淳化元宝	宋 990	1 (行)		真書・行書・草書あり。背文変化あり。
4	至道元宝	宋 995	2 (真1、草1)		真書・行書・草書あり。背文変化あり。
5	咸平元宝	宋 998	1		真書銭のみ。
6	天聖元宝	宋 1023	1 (真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
7	熙寧元宝	宋 1064	2 (真)	模鑄銭1	真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
8	皇宋通宝	宋 1037	2 (真1、篆1)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
9	元豐通宝	宋 1078	7 (行3、篆4)	銭形大小あり。	宋銭中最も鑄造量、日本への渡来大。行書・篆書・隸書あり。銭形不統一。
10	元祐通宝	宋 1086	2 (真1、篆1)	” 模鑄銭1	日本への渡来量大。真書と篆書あり。銭形多種。
11	紹聖元宝	宋 1094	3 (”)	背文(星文)1、(無文)1	真書と篆書あり。背に月文のあるもの。星文のあるものもあり。
12	元府通宝	宋 1098	1 (篆)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
13	聖宋元宝	宋 1101	3 (真2、篆1)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
14	大觀通宝	宋 1107	1		美しい書体。
15	政和通宝	宋 1111	2 (真)		真書と篆書あり。文字変化多い。
16	淳熙元宝	南宋1174	1 (真)	背文字(月星)1、(無文)1	真書と篆書あり。文字の大小あり。淳熙7年以降背に鑄造年次入る。
17	不 明	不 明	6	磨耗激しく判読不能。	
18	元豐通宝	宋 1078	1 (篆)		No.1
19	元祐通宝	宋 1086	1 (真)		
20	開元通宝	唐 621	1		
21	淳化元宝	宋 990	1 (行)		
22	景祐元宝	宋 1034	3 (真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
23	皇宋通宝	宋 1037	1 (篆)		
24	熙寧元宝	宋 1064	1 (真)		
25	元宝通宝	宋 1078	1 (行)		No.2
26	元祐通宝	宋 1086	1 (真)		
27	聖宋元宝	宋 1101	1 (篆)		
28	大觀通宝	宋 1107	1		
29	政和通宝	宋 1111	1 (篆)		
30	不 明	不 明	10	磨耗激しく判読不能。	
31	元祐通宝	宋 1086	1 (篆)		No.7
32	不 明	不 明	1	磨耗激しく判読不能。2つに折れている。	出土地点不明 不明
合 計			68枚		

埋納されたものと推測しうる。

〔その他の遺物〕

古銭以外の出土遺物はどれも微小破片で、うち比較的良好なものは第5図に出土地点を明示したが、図化しうるものは見られなかった。No.5の鉄釉陶器片は仏花瓶の頸部と思われ、2次焼成を受けた可能性が明瞭に残る。美濃産の可能性が高い。No.6は土師器系土器の杯口縁破片である。No.4と8は鉄製品で、4は器種判断し難く、8は刀の破片とも考えられる。No.3は発掘時に漆器片と考えられたが後の整理時に、現代の木片であることが判明したので除外した。No.9は調査に先立って出土した26枚の古銭出土地点である。

5、調査以前出土遺物（第8・9図、第3・4表）

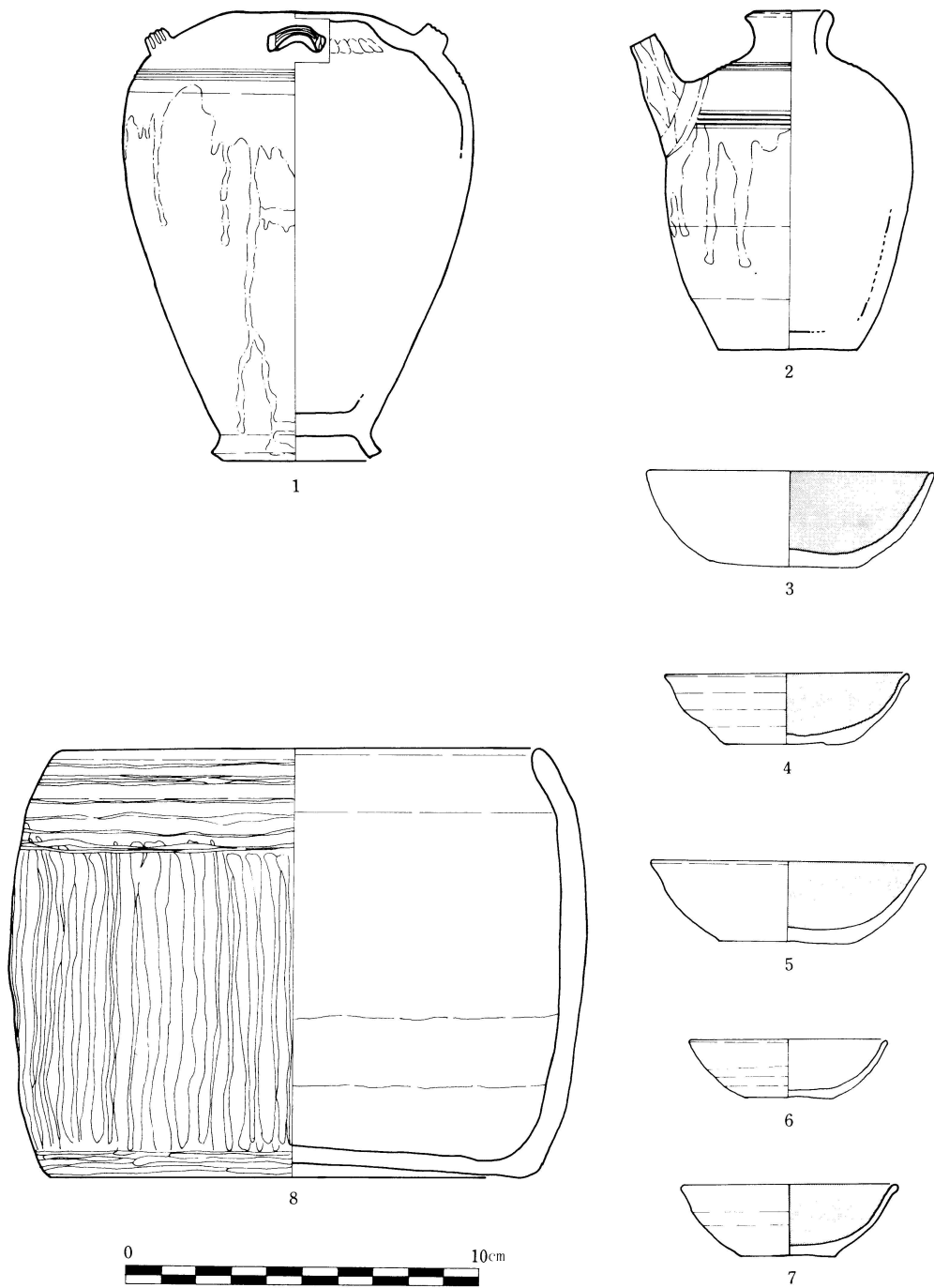
今回の発掘調査以前に出土した遺物には、昭和30年7月30日に県道・上田茅野線拡幅工事に伴って発見され寄贈を受けたものと、耕作などに伴って発見され寄贈を受けたものがある。これらの遺物出土・寄贈年代が昭和30年までと、埋蔵文化財の重要性が一般に認識されるようになる以前のことであり、^{〔注1〕}出土地点・土層・伴出遺物の有無などの詳細は不明であるが、寄贈を受けた丸子小学校には、大正2年に開館した丸子陳列館（後に丸子町郷土資料館と名称を変え町教育委員会に移管。昭和58年丸子町郷土博物館となる）があり、出土遺跡の明確な記載、保存がなされてきたのは幸いであった。

優れた物のみが注目されて寄贈対象となったと考えられ完器が多いが、^{〔注2〕}極めて特色のある物も含まれていて、丸子を代表する中世遺物とも言えよう。これらの遺物の一部は昭和61年に鋤柄俊夫氏により紹介されたが、^{〔注3〕}これらの遺物が寺開土遺跡の性格を把握する上でなくてはならないものであることから、あえてここで触れることとした。

それぞれの遺物の詳細は第3表を参照されたい。なおそこに揚げた遺物の時期は、原則として時代（世紀）で示した。ことに古瀬戸については幾多の研究者による異なる編成表が作成されていることも考慮し、^{〔注4〕}編年期で示すことは避けた。また古瀬戸四耳壺・水注、土師器長頸瓶については、^{〔注5〕}6人の研究者の時代設定がほぼ同一であったことを記しておく。

〔瀬戸灰釉四耳壺〕

四耳壺の口頸部を打ち欠き銭貨埋納容器とした稀な例である。12世紀の初めに中国宋代の白磁四耳壺を模して登場した灰釉四耳壺の本来の用途は貯蔵容器であるが、古瀬戸の四耳壺は若干祭址用に用いられたほかは、ほとんどが火葬蔵骨器として使用されたと考えられる。特に口頸部を打ち欠いて火葬蔵骨器とした例も多く、大町市山寺廃寺出土四耳壺など、県内にも類例が多いが、^{〔注6〕}同様の手法で銭貨埋納容器とした例は、今のところこれのみである。なお飯田市箱川地籍から出土した灰釉四耳壺（^{〔注7〕}昭和36年出土・飯田市考古資料館で展示）も約3000枚の中国



第8図 調査以前出土遺物実測図（参考）

第3表 調査以前出土遺物観察表（参考）

挿図番号 図版番号	器 形 (形式)	法 量	特 徴	時 期	備 考
8 図 1 PL 3 . 1	(古瀬戸) 四 耳 壺	底径 8 cm 胴最大径 19.8cm 残存部器高25.4cm	◎素地は灰白色の粗い土で、典型的な瀬戸・美濃の胎土である ◎成形は紐巻き上げ成形で、内面に3段についだ跡が明瞭に残る ◎口縁・口頸部を欠き、直交する4ヵ所に頸部切り離し時の打撃痕が残る ◎腰から胴にかけては、わずかな弧を描いて立ち上がり、強く内彎する肩部につながる ◎高台は細長く、ほぼ方形の断面を呈し、強く外反する。また高台付着時の回転横ナデ痕も見られる ◎耳は肩部の上半部に、直交する4ヵ所に貼り付けられている。薄い板状の耳で上面に4本の突線を付すが、成形均一でなく乱れ見られる。古瀬戸の後半段階に見られる退化し飾りと化したものでなく、充分使用法を意識して作られている ◎器面装飾は肩部の下半部に4条の櫛描文が見られる。最も一般的な装飾法 ◎釉は灰釉の刷毛塗りで、肩から底部にかけて全面に釉流れが見られる。また吹き出しも随所に見られる ◎焼成は良好であるが、胴部のそここに焼成に伴う割れが見られる。外部最大のものは約1.4cm、内部のものは約3cmに達する ◎底部に釉掛けは見られず ◎肩部櫛描文そばにわずかながら墨の付着が残る ◎緑色凝灰岩の蓋石が伴出した ◎長期間土中にあった影響を受けた、釉の剥落が肩～胴部にかけて見られる	鎌倉（後）	昭和30年出土 銭貨埋納容器として使用 (納入古銭別表参照。古銭内容から伝世使用後、埋納容器に転用されたと考えうる)
8 図 2 PL 3 . 2	(古瀬戸) 水 注	口径 4 cm 底径 7.9cm 胴最大径 14 cm 器高 19 cm 注口口径 1.5cm	◎素地は暗灰白色の緻密な土 ◎成形は水逸轆轤成形とも思われるが詳細不明 ◎注口部の対極に把手があったと考えられ、口頸部及び肩部に痕跡明瞭に残る。ことに肩部は補修が見られ、痕跡が見事に消し去られている。 ◎短か目な頸部は外反して延び、口縁部端は内傾して仕上げられる ◎腰から胴にかけては、ゆるやかな弧を描いて立ち上がり、肩部上半部に注口及び把手の下部がつく ◎器面装飾は、口縁部内面に浅い沈線が1条巡るほか、肩部最上部付近に3条の櫛描文が巡る。また肩部下部付近の4条の櫛描文は、注口部取り付け時の指おさえ痕によりとぎれる ◎釉は底部をも含む外面全体に施され、内面にも一部見られる。前述の四耳壺より安定した灰釉で、釉層も厚い ◎焼成も良好であるが、底部に焼成時の割れが見られる ◎長期間土中にあった影響を受けた、釉の剥落が胴～腰部に多く見られる ◎高台は見られない	鎌倉(末)～ 室町(初)	昭和30年出土 破損部の補修を丁寧に仕上けていることなどから、ある程度伝世した後に埋蔵されたものと考えられる
8 図 3 PL 3 . 3	(土 師) 杯	口径 16.2cm 底径 8.3cm 器高 5.4cm	◎砂粒多く、やや粗い胎土 ◎底部回転糸切りヘラミガキ。体部はゆるやかな弧を描き立ち上がる ◎外面色調暗褐色。底部糸切り後ヘラミガキ ◎内面は黒色処理。口縁部ヨコヘラミガキ、体部タテヘラミガキ（光沢有） ◎比較的粗雑な成形で、体部外面には空洞も見られる ◎焼成良好	平安	出土年代不明 ほぼ完器（90%）
8 図 4 PL 3 . 4	(土 師) 杯	口径 13.5cm 底径 7 cm 器高 4 cm	◎砂粒多く、やや粗い胎土 ◎底部回転糸切り。体部は波をうって外反 ◎外面色調明橙褐色 ◎内面黒色処理。食物カスの付着見られる ◎粗雑な成形で、焼きムラも見られる	平安	出土年代不明 ほぼ完器（90%）
8 図 5 PL 3 . 5	(土 師) 杯	口径 15.2cm 底径 7.4cm 器高 4.5cm	◎砂粒若干含むが比較的良好な胎土 ◎底部回転糸切り。体部はゆるやかな弧を描いて立ち上がり、口縁わずかに外反 ◎外面色調明赤褐色。回転ナデ ◎内面黒色処理。口縁部ヨコヘラミガキ、体部タテヘラミガキ（光沢有） ◎丁寧な成形で、焼成も良好。	平安	出土年代不明 完器

8 図 6 PL 3 . 6	(土 師) 杯	口径 底径 器高	11 cm 5.1cm 3.2cm	◎砂粒多く、やや粗い胎土 ◎底部回転糸切り。体部はゆるやかな弧を描いて立ち上がり、 口縁先端尖る ◎色調は橙褐色 ◎比較的粗雑な成形で、焼成は良好	平安	出土年代不明 ほぼ完器（90%）
8 図 7 PL 3 . 7	(土 師) 杯	口径 底径 器高	12 cm 5.3cm 4 cm	◎砂粒多く、やや粗い胎土、 ◎底部回転糸切り。体部はゆるやかな弧を描いて立ち上がり、 口縁わずかに外反 ◎外面色調赤褐色。体部ヨコナデ ◎内面黒色処理。口縁部ヨコヘラミガキ、体部タテヘラミガキ（光沢有） ◎比較的丁寧な成形で、焼成良好	平安	出土年代不明 遺存率80%
P L 3	(土 師) 長 頸 瓶	口径 底径 胴最大径 器高		◎砂粒を含むが良好な胎土 ◎成形は水挽轆轤成形 ◎色調は赤褐色で、焼成良好 ◎底部は糸切り後ナデ調整、幅1cmの外反する輪高台がつく ◎体部はヨコナデ ◎口縁及び高台の一部を欠くかほぼ完器 ◎器形は灰釉長頸壺を写したもので、稀な例	平安(10C)	昭和2年出土 ほぼ完器（95%）
8 図 8 PL 3 . 8	(陶 器) 火 鉢	口径 底径 器高	27cm 27cm 24cm	◎素地は暗褐色の粗い上で、微細な砂粒混じる ◎形成は紐巻き上げ成形で、比較的低火度焼成 ◎内面は上半部のみ回転ナデを施すが、下半部は未調整 ◎外面は口縁部ヨコミガキ、体部はナデ調整後ヘラタテミガキを施す。また体部と底部の継ぎ目付近はヨコヘラケズリ痕が見られる ◎回転板上に砂粒を蒔き形成したと見え、底部切り離し痕は見られない	近世	出土年代不明 完器

銭を納めていて、銭貨埋納容器とされた例であるが、その口縁部が一部欠損してはいるが口頸部を意識して打ち欠いたとは考えにくい。

さて寺開土遺跡の灰釉四耳壺は、緑色凝灰岩の扁平な蓋石を伴っており、約3000枚の中国銭が納められていたという。その量の多さから全国各地に類例の見られる備蓄銭（備考貯蓄）用に埋納されたのは確実である。埋納銭貨の全貌は今となってはうかがうべくもないが、現存する197枚の銭貨で見る限り、下限は南宋代咸淳元宝（初鑄年1265）で、これと四耳壺の年代を考え併せると、埋納年代は鎌倉末以降と考えられる。

柴垣勇夫氏は銭貨埋納例の返遷を、「愛知県における銭貨埋納容器の諸例」の中で、①奈良・平安期の皇朝十二銭を中心として、骨蔵器の中へ副葬される例、寺院等の地鎮・奉賽として埋納される例が多い時期、②平安末期以後の中国渡来銭を中心として、経塚等への少量の奉賽銭を含みながら、13世紀末から14世紀前半期および14世紀末から15世紀前半期の2時期にピークを持つ万を超す量の備蓄銭として埋納された時期、③桃山から江戸初期以降の備蓄銭内容に邦貨が主体をなし、金銀貨が中心となる時期の3期区分に分類した。

この区分に従うと、寺開土遺跡における銭貨埋納例は、②の前半のピークに合致するものと考えられ、偶然の思いつきにより埋納が実行されたのではなく、全国的な風潮の影響を受けて埋納が図られたものと想像される。同様に飯田の四耳壺は②の後半のピークに位置付けることができよう。

これらの②にあたる埋納容器は、愛知県の例を見るに常滑の甕を使う例が多い。長野県内で

も確実に^{〔注9〕}5例は見られ、今後も中世遺跡発掘件数の増加に伴って出土例が増すことは確実であろう。しかし甕に比して納入量の限定される四耳壺をあえて使用している例は、私の知る限りではこの2例^{〔注10〕}しかなく、特に寺開土の例は火葬蔵骨器に見られると同様に、あえて口頸部を打ち欠いている点で注目されよう。

現存する埋納銭貨197枚の種別は第4表に掲げたとおりであるが、私鑄銭混用時代の明銭がまったく見られないことなどから、この中に本邦模鑄銭が混在する確率は極めて低いと考えられ、それゆえ下限をほぼ前述した時期に設定しうる。

〔瀬戸灰釉水注〕

古瀬戸最盛期の類例の一つ。古瀬戸水注には大・小の2種類が見られるが、大型の範疇に入る。注口の反対側に把手がついたが破損して見られず、破損部を漆を使用して丁寧に補修している。そのため、ある程度の伝世期間を経た後、埋蔵されたものとも考えられる。

今のところ長野県下における古瀬戸水注の出土例は極めて限られているが、そのうちでも代表的な優品といえよう。^{〔注11〕}

〔土師器杯〕

完器もしくは完器に近いものが5点見られ、いずれも出土年代・地点は不明である。砂粒を多く含むやや粗い胎土のものが多く、底部はいずれも回転糸切り。内面を黒色処理したものが4点をしめる。詳細は観察表のとおり。時代はいずれも平安時代と考えられる。

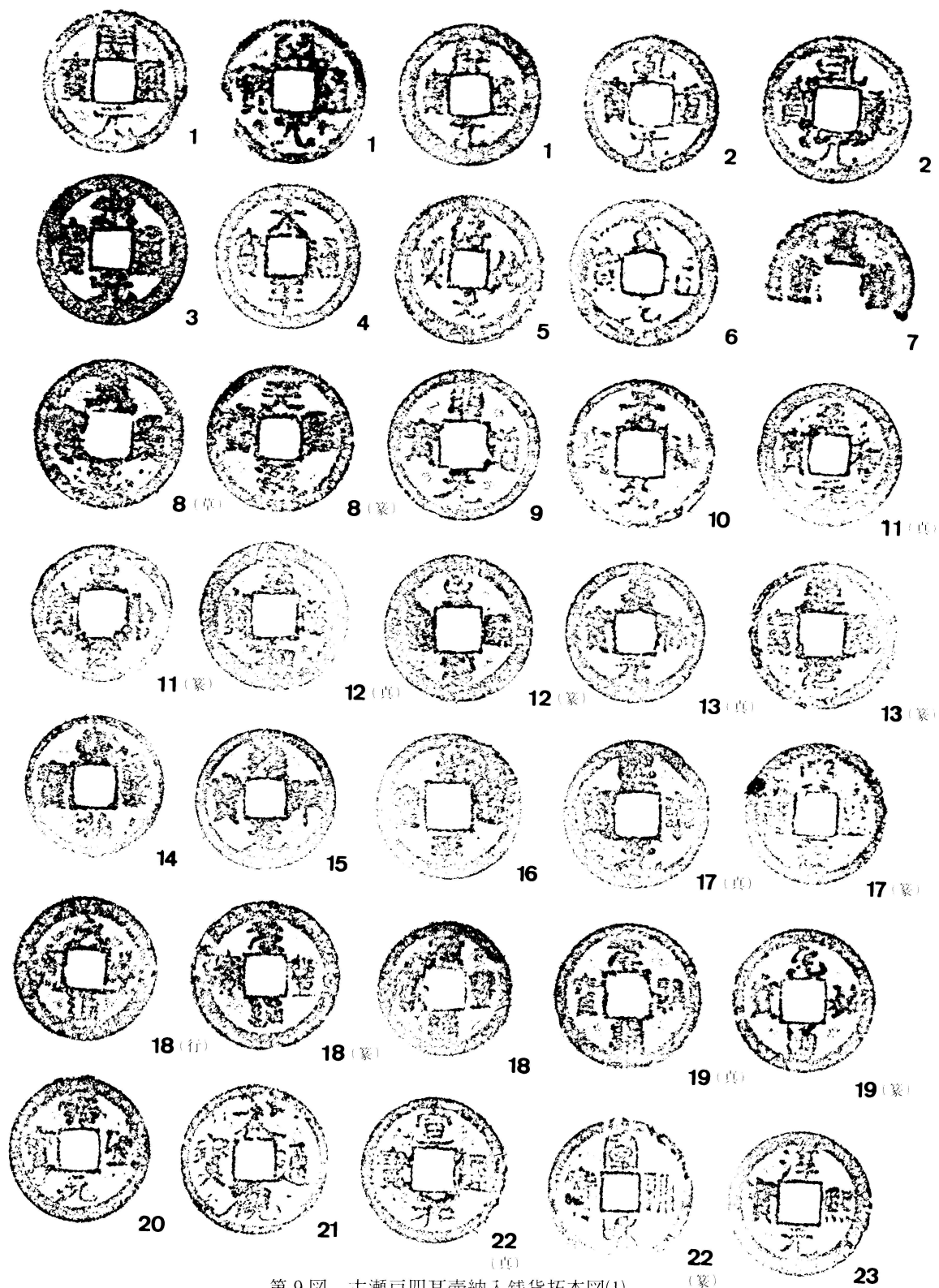
〔土師器長頸瓶〕

灰釉長頸瓶を模して作られた土師器の長頸瓶。昭和2年に出土した。口縁部を一部欠くが、ほぼ完器である。長頸瓶は古墳時代の細頸瓶から転化した東海地方独特の瓶の一種で、奈良時代中頃～平安時代にかけての長い歴史をもち、猿投窯では灰釉陶器の最も主要器種として量産されていた。この土師器の長頸瓶は、その灰釉陶器の長頸瓶を写した稀な例で、モデルとなった灰釉陶器の器形から類推して、その上限を10世紀に比定しうる。

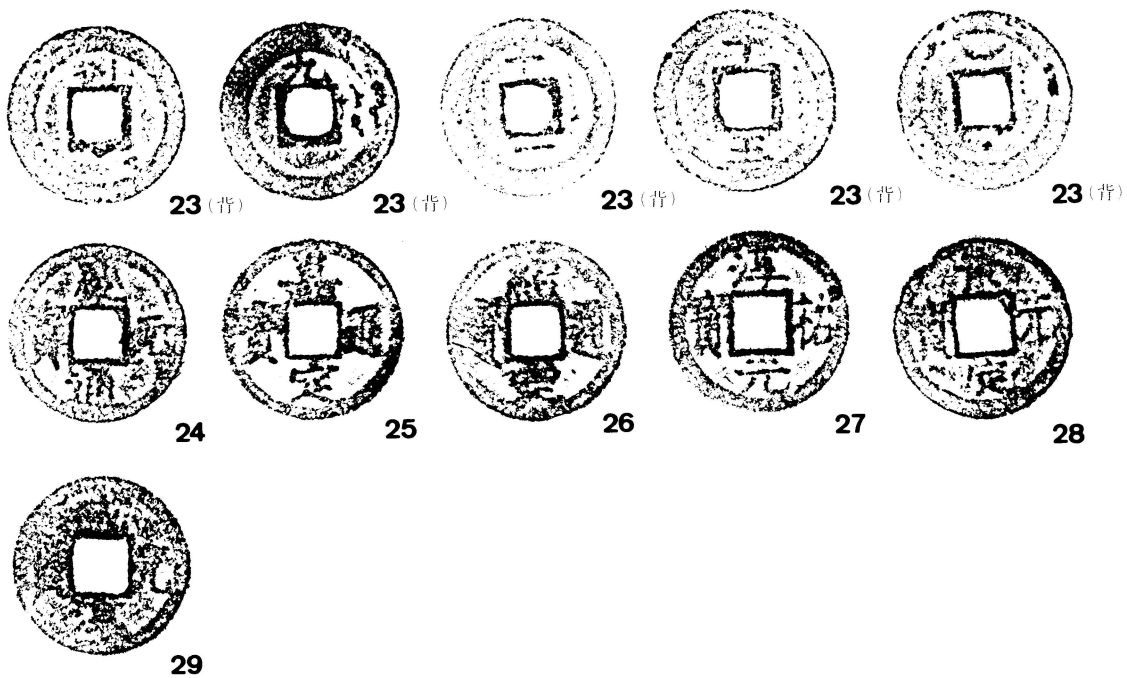
〔火鉢〕

微細な砂粒を含む暗褐色の粗い胎土の火鉢で、回転板上に砂を蒔き成形したとみえ、底部切り離し痕は見られない。胴部は紐巻き上げ成形。全国に陶磁窯が最も登場した近世の遺物で、産地及び詳細な時期の特定は不可能である。完器であるが出土年代は不明。

寺開土遺跡出土と記録されているが、寺開土地籍には近世に人が住んだ記録がなく、また社寺もなかったことなどから、確実にそうであるか疑問の残る遺物である。



第9図 古瀬戸四耳壺納入銭貨拓本図(1)
(番号は表に同じ)



第9図 古瀬戸四耳壺納入銭貨拓本図(2)
(番号は表に同じ)

第4表 古瀬戸四耳壺納入銭貨種別表

古銭No	名 称	初铸年	数量	残存古銭の特徴	備 考
1	開元通宝	唐 621	4	背文無し。文字に大小の別。	唐の代表的通貨。長期間大量に鑄造され日本への渡来量大。左角に宝の字を置く形式を固定化。背文様に3種ある。
2	乾元重宝	唐 758	9	文字変化見られ、背文磨耗激しく判別不可。	文字変化多く、背文変化もあり。
3	宋通元宝	宋 960	2	背文変化見られる。	別称・宋元通宝。背文変化あり。
4	太平通宝	宋 976	4	背文なし。	背文変化あり。
5	淳化元宝	宋 990	1(草)		真書・行書・草書あり。背文変化あり。
6	至道元宝	宋 995	1(草)		真書・行書・草書あり。背文変化あり。
7	天禧通宝	宋 1017	1		真書銭のみ。
8	天聖元宝	宋 1023	10(草4、篆6)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
9	明道元宝	宋 1032	7(真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
10	景祐元宝	宋 1034	1(真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。
11	至和元宝	宋 1054	34(真24、篆10)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
12	至和通宝	宋 1054	8(真8、篆2)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
13	嘉祐元宝	宋 1056	2(真1、篆1)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
14	嘉祐通宝	宋 1056	1(真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
15	治平元宝	宋 1064	2(真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
16	治平通宝	宋 1064	1(真)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
17	熙寧元宝	宋 1068	7(真4、篆3)		真書と篆書あり。書風変化も見られる。銭容変化も見られる。
18	元豊通宝	宋 1078	6(行1、篆5)	銭形大小あり。	宋銭中最も鑄造量、日本への渡来大。行書、篆書・隸書あり。銭形不統一。
19	元祐通宝	宋 1086	2(真1、篆1)	銭形大小あり。	日本への渡来量大。真書と篆書あり。銭容多種。
20	紹聖通宝	宋 1094	34		真書のみ。
21	大觀通宝	宋 1107	11		美しい書体。
22	宣和通宝	宋 1119	10(真3、篆7)		真書と篆書。
23	淳熙元宝	南宋1174	13(真)	背文字(捌=八)1、(九)2、(十)1、(十一)3、(十五)1、(月星)5。	真書と篆書。文字の大小あり。淳熙7年以降背に鑄造年次入る。
24	慶元通宝	南宋1195	5	背文字(一)1、(四)1、(五)1、(不明)2	真書のみ。背元～六まで。
25	嘉定通宝	南宋1208	6	背文字(一)1、(二)1、(三)1、(六)1、(八)1、(十)1、	背元～十四まで。
26	招定通宝	南宋1228	2	背文字(二)1、(不明)1、	背元～六まで。
27	淳祐通宝	南宋1241	6		これのみ無背。現存例稀。
28	景定元宝	南宋1260	2	背文字(三)1、(不明)1	背元～五まで。
29	咸淳元宝	南宋1265	1	背文字不明。	背元～八まで。
30	不 明	不明	4	磨耗激しく判読不能。	
合 計			197枚	総重量663.5g 丸子陳列館への寄贈は一部	出土数約3,000枚(S30、7、23) 寄贈分を除いて所在不明

日本への渡来銭の大半を占める

日本渡来盛へになるが、鑄造量少なく渡来量は少ない

〈注1〉埋蔵文化財が特に認識されるようになるのは、昭和29年の文化財保護法改正により第4章として埋蔵文化財が独立して以降のことであろう。また昭和50年には開発ラッシュの影響を受けて法の全面改正が行われ、整備が図られた。

〈注2〉1956「信濃史料」第1巻上、県内遺跡表丸子地区No.1194には、今回示した資料のほか、須恵器甕破片も収蔵されていたことが記しているが、遺物本体への注記がなかったとみえ、現在ではどれがその破片か特定できない。今回の調査以前に出土した破片で寄贈を受けたのは1点のみである。

〈注3〉鋤柄俊夫1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」(『信濃』38-4) 参照のこと。私の企画立案した丸子町郷土博物館特別展「古陶磁展(1)」開催時、長野県史刊行会による県内出土展示物の実測作業が行われたが、その作業に従事した鋤柄氏により信濃に移入された中世陶磁の論考がなされた。古代・中世の県外産陶磁を扱ったことでは県内初であろうこの古陶磁展(1)に際しては、産地(猿投・瀬戸・美濃・常滑——展示スペースの関係で限定)別編年表と代表的産地遺物をあわせて展示したこともあり、県内出土遺物に対してはあえて時期を付さなかったが、私どもで想定した時期と鋤柄氏の設定した時期に大きく差の見られるものもある。例えば丸子町深町遺跡出土の灰釉おろし皿は、鋤柄氏が13世紀前半に位置付けているのに対し、檜崎彰一・宮石宗弘氏と私は室町時代の末、すなわち大窯期の遺物と考える。また同遺跡の灰釉仏花瓶についても、鋤柄氏の鎌倉末～南北朝時代への位置付けに対し、室町初期～中期と異なりが見られる。同様に幾つかの異なりが随所に見られるものの、これまで研究例の少なかった、信州における中世陶磁研究の貴重な論考であることは確かである。

〈注4〉赤塚幹也・宮石宗弘・檜崎彰一・藤沢良祐氏の編年などが知られている。古瀬戸の編年は前・中・後の3時期に大別することが定説となってきたが、近年檜崎氏は12世紀代の草創期及び16世紀の大窯期を加えた5段階区分を提唱している。また藤沢氏は従来の3期区分をさらに細分化した編年を発表するなど、新しい動きが見られるが、ここでは詳述を避ける。なお美濃の古瀬戸系施釉陶器に関しては、井上喜久男、檜崎彰一氏の編年などが知られる。

〈注5〉竹内順一・檜崎彰一・熊沢輝雄・宮石宗弘・倉田芳郎(以上実見順)の各氏が実物を見ている。

〈注6〉藤沢良祐1979「長野県出土の古瀬戸について」(『信濃』31-11)、丸子町郷土博物館1983「古陶磁(1)」、鋤柄俊夫1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」(『信濃』38-4)など参照されたい。

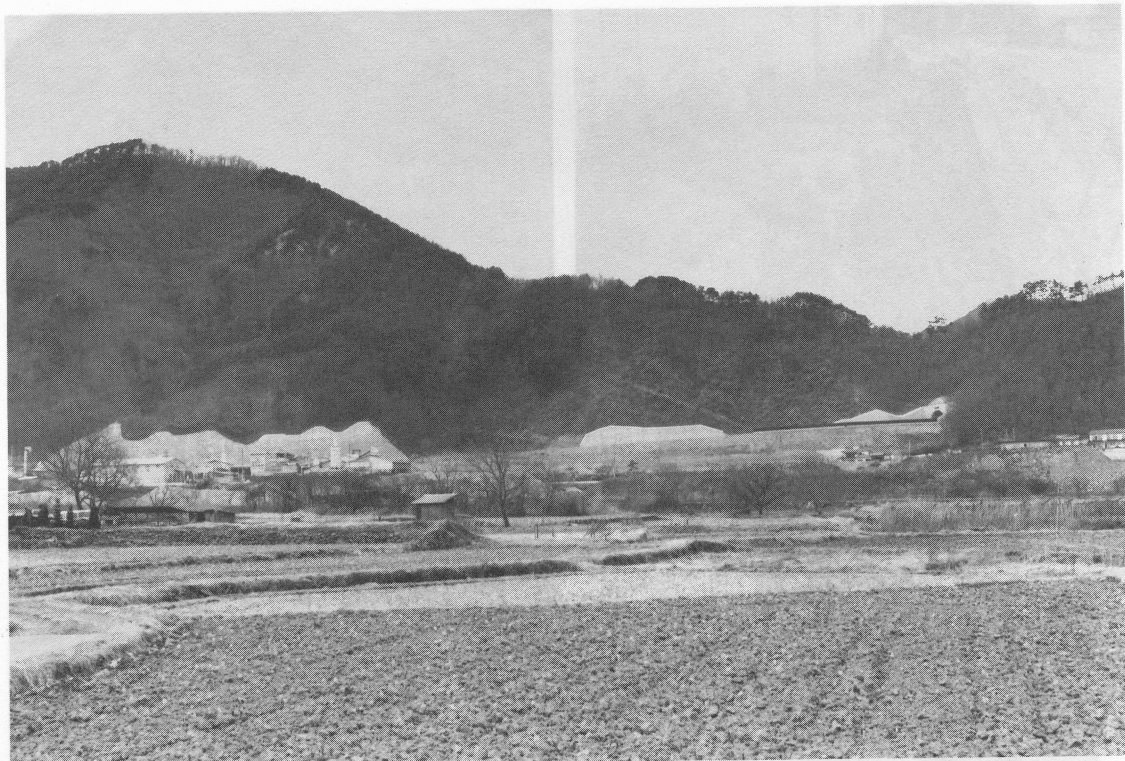
〈注7〉南北朝末～室町初期、すなわち14世紀末～15世紀初期に位置付けられる四耳壺で、埋納銭貨の下限は元代至大通宝(初鑄年1310)である。

〈注8〉柴垣勇夫1986(『愛知県陶磁資料館研究紀要』5)

〈注9〉 佐久市根岸カジ畑、上田市塩尻（以上東信）、塩尻市洗馬宗賀、飯田市伊豆木夜明し山、下伊那郡阿南町寺尾（以上中・南信）出土のものがこれに当たる。これまでの特別展・古陶磁シリーズなどに関し、輸入陶磁をも含めた信州の中・近世陶磁出土例の継続的な調査を実施してきているが、記録にはあっても実物の所在が不明となっているものなども多く、現時点で確実なのはこの5例のみである。

〈注10〉 前記の注8の論文中には、古瀬戸釉小壺（小牧市）、須恵器長頸壺（名古屋市）などを埋納容器とした例も示されているが、いずれも埋納銭の量は少なく、備蓄銭用に埋納された例とはいえない。

〈注11〉 破片は除くとして、器形をある程度把握しうる例は、今のところ寺開土遺跡のほか、長野市若穂十二山遺跡（東光寺蔵）、木曽郡南木曽町上垣外遺跡出土例のみである。最近偶然、東山道に沿った青木村大宝寺（国宝・三重塔で有名）に古瀬戸四耳壺（完器）が伝世しているのを発見したが、中世信濃における古瀬戸の需要は相等根強いものがあつたとも想像され、今後類例のふえる可能性も十分ある。



1 遺跡遠景（依田川対岸、東より）



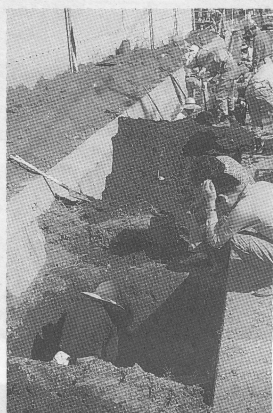
2 調査区全景（北より）



1 発掘作業



3 古銭出土状況



2 発掘作業



4 2号グリッド東壁土層状況

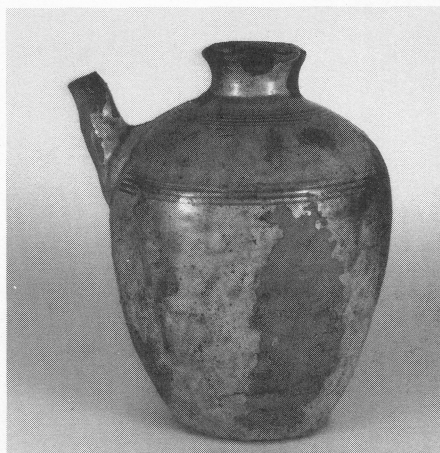


5 1号グリッド北壁土層状況

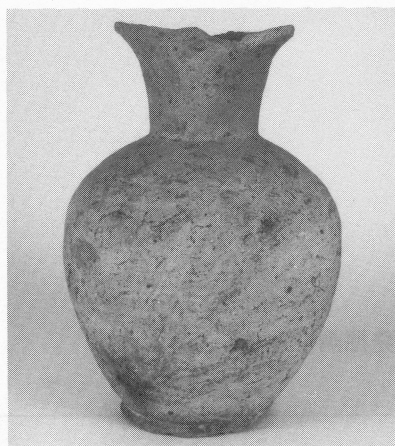
(013) 景全図表 5



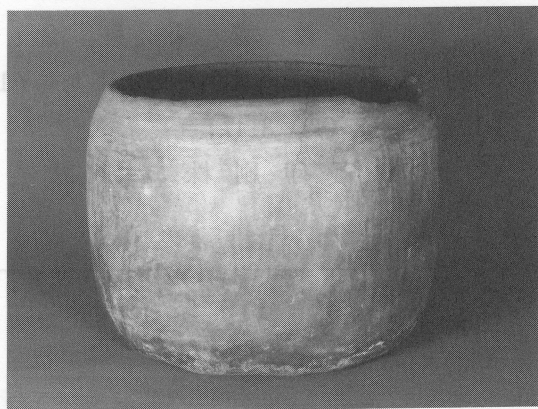
1



2



4・7・6 (前列) 3・5 (後列)



8

調査以前出土遺物 (参考)

寺開土遺跡——長野県小県郡丸子町寺開土遺跡発掘調査報告

昭和63年 3 月

編 集 昭和62年度丸子町寺開土遺跡発掘調査団

発 行 丸 子 町 教 育 委 員 会

〒386-04 長野県小県郡丸子町大字上丸子1592の2

TEL 0268 (42) 3147

印 刷 信 毎 書 籍 印 刷 株 式 会 社

